９「三たびの海峡」

無理やり連行され、ろくろく食物も与えられないで、牛馬のような労働をさせられる。反抗すれば半殺しの拷問が待っている。主人公の河時根（ﾊｰｼｸﾞﾝ）は、戦時中朝鮮から強制連行され、炭鉱で無理やり働かされた。帚木蓬生の「三たびの海峡」を読了した。

寒村の農家の次男として生まれた主人公。今は成功し釜山でスーパーマーケットを経営する老実業家が、在日の旧友から手紙をもらうことから物語が始まる。

手紙は、昔の仲間で今も日本に残っている徐鎮徹（ｿｼﾞﾝﾁｮﾙ）からで、炭鉱の象徴であるボタ山をなくし、企業誘致をする動きが出ているという内容だった。麓には朝鮮人寮や無縁墓がある。

河時根は三度めの海峡を渡る決意をする。

父親の身替りとなり「徴用」に取られ、１７歳で日本に渡り強制労働された主人公が、人生の終末を迎え昔を回想するという形で物語が進められる。

一度目は連行されて、船底に積まれて釜山から日本へ渡った海峡。炭鉱での生活は過酷である。ガス噴出、落盤、トロッコの暴走で朝鮮人も日本人も死んだ。想像を絶する私刑を行うのは、日本人とその配下として日本人に自由に操られる朝鮮人である。それによって何人もの朝鮮人が死んだ。

主人公は１年半ほど強制労働に耐え決死の脱走をし、港湾荷役人夫として働く。彼はそこで知り合った日本人の戦争未亡人「千鶴」と結ばれ、終戦とともに二人して漁船に乗り帰国する。これが再びの海峡である。「千鶴」は子供を宿し、決死の覚悟で朝鮮に行く。二人は故郷で新しい生活を始めるが、敵国の日本人女性（倭奴：ウェノム）を伴った彼は家長（長兄）から認めてもらえない。想像を超える倭奴に対する偏見に耐え切れず、結局千鶴は帰国せざるを得なくなってしまう。その後、主人公は独り釜山に出て商売を始め成功する。彼は、ボロボロになって祖国に帰った従軍慰安婦であった女性と再び結婚し三人の子供を設ける。

そして、旧友からの手紙の知らせに、自分の心の隅に棘のように突き刺さっていること、それは借りとでもいうべきものを返すために「三たびの海峡」を渡る。

それは「ボタ山の陰にあって朽ちかけた同胞の無縁墓を守ること」そして「千鶴との間にできた自分の息子（河本時郎）に会うこと」である。

関釜フェリーは修学旅行で日本を訪れる女子高生たちの姿も見える。時は流れた。物語は５０年の歳月を挟み、過去と現在を往還しながら進む。もう「千鶴」は死んでこの世にはいない。

主人公は成長した時郎に再会、時郎が母は一人で靴墨の行商をして、自分を育ててくれたことを話す。

主人公は、死ぬ覚悟で三たび目の海峡を渡ってきている。多くの朝鮮人の苦難の歴史である「炭鉱歴史資料館」を造ることを息子に託す。そして、同胞を私刑により無残に死に至らしめた、日本人や配下朝鮮人の残党たちを殺害することによってその「借り」を返そうとする。そして自分の遺骨の半分は釜山に、残り半分はボタ山に埋めるように息子に告げる。ボタ山からは千鶴の墓を臨むことができる。

そして彼は言う『生者が死者の遺志に思いを馳せている限り歴史はゆがまない。』・・・・・・

重みのある言葉である。日本が朝鮮に対して行った過ちの大きさ、それに対する日本人の無理解、無関心に憤りを覚えた。

これからも、日本が隠してきた歴史の真実を認識するようにしていかなければならない。

（２０１１．０２．２０）　親子が再会する小説の部分「付－２」